九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

新尚古主義と二州問題の言論

長，壽吉

https://doi.org/10.15017/2344406

出版情報：史淵. 11, pp.63-74, 1935-06-30. 九州帝国大学法文学部
バージョン：
権利関係：

新尙古主義と二州問題の言論

長　壽　吉

世紀の中葉に於て、歷史は、政治改革の傳播と國民主義の擡頭と云ふ、二つの傾向の間に、佛蘭西に在りては、第二帝政の諸事象の上に、又獨逸に在りては、所謂國民的統一の二重主義的解決の發展の上に、更にこれ等兩國の關係、殊に境界の問題と、舊教々會の政權の問題の上に、幾多の留意すべき且その考察まことに復雜なるべきものがある。怜かも廣汎な過渡の時期に當つて、前代の諸事象の變替收約が、後代に向つて進行する一般なるところの現象の、最も錯綜せる種類のものを觀ぜしめる。

從つてこの廣汎なる過渡の時期の、錯綜せる事象の間には、思想文藝の鬱然たるものを觀んよりは、寧ろ後代に向つて成長すべき、その萌芽を抄獵することを、必要とする。果して吾々は、こゝに「世紀後半のシヤトーブリアン」を知るのである。シヤトーブリアンが世紀初に於ける、佛蘭西思想の上の位置を以て、この世紀後半のシヤトーブリアンたる Frédéric Mistral の上に類推することは、當

にこの廣汎なる過渡の時期の觀察に、缺くべからざるところである。

何の故に自然主義の初期の狀態、或はネオ浪漫派の運動が、浪漫派文藝の絢麗に對して、寂寞たる沒趣味的に陷つたか、何の故にネオカトリツク思想、否むしろネオカトリツク派の行動が、高踏的な舊敎ルネサンスに對して、凡俗的卑近的となつたかに就いては、政治と社會との事象の上に、一般過渡的傾向を觀ることに照して、了解するに苦しまない。

この間に在りて、吾々が「世紀後半のシヤトーブリアン」を知ることは、實に大旱雲霓を望むと謂ふべきか、或は草野に一滴を求むと謂ふべきか。爰に一源流を後代の歷史に向つて置くことは、充分に適當である。

文藝上のフオルムの提唱に由つて、ワイマアル新尙古派は新尙古主義思想の濫腸として喧傳される。然しながら、フオルムの提唱は、文藝の構成の論議の上には、哲學的に又文藝批判的に顯著なりとは言へ、これのみを以ては、尙この思想傾向の深淵を究め得たりと謂ひ難い。尙古の思想の含蓄が、猶他に、これらとはその形式を異にし、趣向を別にして、實はこれに先だちて、プロヴアンスの一詩人たる世紀後半のシヤトーブリアンの、一八六七年の "Calendou" に於て、且その以前一八六九年の "Mireille" に於て、存することが窺はれるのである。

既に一八五四年に於て、"Félibres" と云ふ文藝の協會が、Mistral 等に由りて創立され、その目的としてプロヴアンス地方語の尊重と、地方傳統の顯揚とを有し、當時の文藝傾向に對しこの運動

が、「小麥から籾殼を篩るため」（Suchir u, Birch-Hirschfeld-Französische Literaturgeschichte）であつたことは、こゝに新尙古主義的思想が萠芽し、延いてその壤古的な傳統尊重が、後代の諸種の政治思想に、及ぶものの存したことが知られる。ボールペエル・フロマンの述ぶるところに從へば、プロヴアンス詩人の養ひ得た文學思潮は、政治思想的であり、翻つて又宗教思想的である（Beaurepaire-Froment-Les Littératures Provinciales, Avec une esquisse de géographie littéraire）。こゝに吾々の關與の處がある。近代佛蘭西の傳統主義の萠芽をこゝに觀る。

前述の如き過渡の時期の、複雜なる政治的社會事象の交錯に照して考へらるゝ、唯物的な焦燥的な思想傾向の間に、世紀中葉のプロヴアンス詩人が、「大なるホメロスの膝下に伏する後進」（umble escoulan dou grand Oumèro）として、彼の周圍を率ゐてゐたことは、顯著な事實であつた。その影響するところ亦甚だ大である。ラマルティーヌは「ミレイユ」を評して、ホメロス嘆美者を稱揚し、イオニア海の島々が、夢の如くプロヴアンスの岸に近づきて、浮動するが如く感ずるものありとした（Cours familier de littérature）。風光明媚にして習俗純厚なるプロヴアンスに於ける、上古アツテイカの懷古は、誠に自然のそのところを得たものがある。この所謂 Atticisme は、おのづから前記のフエリイブル協會の目的に見る如き、所謂 regionalisme に延長され得る。文藝上の新尙古主義思想の濫腸が、廣義の傳統主義に發展して、後年の諸種の言論を生むところの源流を、このプロヴアンス詩人及びその周圍の、古代文明景慕と地方傳統尊重とに觀察することは、決して牽强の說ではな

い。

フエリイブル文藝協會の創立、「ミレイユ」の著作のあつた一八五〇年代から、六〇年代に亘つて、佛蘭西の二つの道は、頗る明瞭に觀察されるものがある。實證哲學論とレ・ミゼラブルを一面に觀るものは、亦同時にピウス九世敎書、その一は "Ineffabilis Deus." であり、更に他は "Quauta Cura et Syllabus." であるもの、則ち前記とは全く切離されたる部分に存するものを觀る。又フアルウ敎育法規の成立に對して、一八六五年の "League de l'enseignement" の創立が、等しき關係に存することをも觀るものである。

この二つの道の上に、「ミレイユ」の思想とフエリイブル協會の運動が、何を與へたかを問ふならば、一は文藝上の思想を、現實と自然との抱束から脫せしめて、漂渺たる幻想の影を追ふことに傾かしめ、一は宗敎上の思想を、超國境的なる構想から反省せしめて、脚下の暗影を照すの道義に明らかならむとするに、至らしめるものであると謂ひ得る。

換言すれば、古代憧憬のアツテイシスムから、地方傳統尊重のレジョナリスムを以て、新尙古主義思想を養つたものは、これを大局的に觀じて、概括的に廣義の傳統主義として、近代佛蘭西の世紀中葉推移轉換の期から、後代に亘つて、一般思想變遷の上の國民主義思想と、深き關係を有してゐたものである。一八五八年オルシニ事變と、一八六七年メンタナ戰爭との兩枰的關係の時期に在つて、後年イポリト・テーヌが七〇年戰役の後日に、その「近代佛蘭西起原論」の上に詳述した如き、レジョ

ナリスムにして國民主義なるもの、之を總括して傳統主義と稱すべきもの、延いて又最近の著明なる國民主義的諸言論に擴張されたものは、既にこのフェリイブル協會の主張の中に、その萠芽を有してゐたものであつた。

これを舊教思想の上に關聯して觀る時は、新尙古主義の流派が、一八七八年八月法皇教書のアクイヌス哲理に關する "Aeterni Patris" に就き、又後年一八八五年教書 "Immortal. Dei." 、更に一八九二年二月教書にして佛蘭西僧侶及び教徒に示したる "Au milieu des sollicitudes" に就きて、深き感激を有したことは謂ふまでもなく、而してそは二つの道あるがためであり、且つ尙古主義則舊教主義たる一面あるがためである。(P. Seiqqel-Les deux France et leurs origines historiqrues) (G. Michor-Documeuts pontificaux)

舊教思想にして國民主義思想に存するものは、プロヴアンス詩人に見うる新尙古主義の徵象と、地方傳統の好尙に存する文學が、舊教ルネサンスの余流に培つた、特殊な一傾向である。クルチウスのブルユヌチエル評傳に由れば、彼は自らをまづ Klassizismus と言ひ、又後に自らを Katholizismus と言つたと (E. Curtius-Ferdinand Brunetière)。彼が何人であつたかは、謂ふまでもない。矣にブルユヌチエルを記すに至つて、吾々はイポリイト・テーヌがこの一括思想傾向の上の位置を明にする要を有する。

A. Sorel, Brunetière, N. de Vogüé, P. Bourget, M.Barrès,Ch. Maurras の先覺者なるテーヌは、

蓋し近代佛蘭西の文學上の、國民主義思潮の中心をなす人である。彼は以前の新尙古主義思想を集攬して、これを後年の種々なる言論に繼承した。彼に關する優れたる評論をしたジロウに從へば、Hippolyte Taine の後半世の文學は、「佛蘭西精神、それが尙古的精神となりたるもの」であつた (V. Giraud-Essai sur Taine, son oeuvres et son influence)、このジロウの書に於て、「歷史學は科學であるのみでなく、同時に藝術であり、又哲學である」と謂ふところの「起原論」の著作に際して、テーヌは從來コント祖述者であり、實證論的史學の主張者でありながら、自づから祖國の觀念が、彼自身の本質に甚深く根を下してゐることを、詳かに述べてゐるのである。殊に彼の母に與へた幾多の書簡に於ては、能くこの當時の彼の心境を、窺はしむるものがある。(Sa vie et sa correspondance. III.)

ジロウは前揭同書の中に述べて曰く、「テーヌにもブルユヌチエルにも、文學と評論とは、決して "une fin en soi" でなかつた。——ブルユヌチエルは文學上の問題を、道義上、社會上、且つ宗教上の問題に推し進めた。——恰かもテーヌが起原論を著作しつゝある頃に於て、彼は佛蘭西國民傳統を阻害しつゝある總ての人々、則ち譚說家、自然主義者、デイレタント、現代主義者、印象主義者等に對して鬪つて居た」と。同樣の比較評論は、シエラアの文學史評論の中にもある (E. Scherer-Etudes critiques sur la littérature contemporaine)。

テーヌが「福音は實に社會的衝動の最上の藥石なり」(Sa vie etc. III. P. 135) と述べたことは、

この比較評論に合せて、兩者の關係を知らしむるのである。一八七六年以來「兩世界評論」紙上に於て、ブルユヌチエルが前記のジロウの言の如き闘を繼けてゐたものは、謂ふまでもなく舊敎的思想にその根據を置きて、國民主義的言論に終始したものである。この場合に於て、先きに記したるブルユヌチユルの自からの言たる、尙古主義にして而して後に舊敎主義たることの意は、參照されねばならぬ。要するにテーヌの文學に於ける傳統主義にして、レジョナリスムなるもの、而してそれは世紀中葉に、その萠芽を有したものは、彼の史學に於ける國民主義となり、同時に福音云々の言に觀る如く、舊敎的思想に關聯すること深かりしと同樣に、ブルユヌチエルに於ても、この一括思想傾向は、その言論に窺はるゝものであり、且彼の論ずるところも亦、國民主義に出づるものであつたことである。

私はこの小論に於て、プロヴアンス詩人の運動が、延いて國民主義に及び、その間に於ける傳統主義と舊敎主義との關聯が、終に二州問題の言論に及ぶものあるを說かんと欲したが、新尙古主義の發端と、テーヌ・ブルユヌチエルとの間の繼承に關しては、適當なる文獻坐右になく、又ソレル・ブウルジェ等に關しても、文獻坐右に無きため、これらは少時省略に從つて、直ちに最近に於ける言論、ことにバレス及びモーラスに就て、即ち二州問題言論に就いて略說することとした。

近代佛蘭西の國民主義が、七〇年戰敗を機として盛んとなつたことは、謂ふまでもない。然しその由つて來るところは、文學的に思想的に甚遠いものがある。七〇年事變は外部的には國家屈辱の自覺

となり、同事變と時を等しくした共產黨亂と、その地方傳播とは、內部的に政治と社會との欠陷の自覺となつた。この場合に於ても、國民主義思想は舊來の文學的思想的傳統の上に於て、最も好く發露されてゐた。「起原論」を書かんとしたテーヌは、その母に宛てたるロンドン書翰に曰く「余の眼前には、佛蘭西が全く內外ともに、挫折崩壞したかのやうに見える。そして余はこの時に當りて、或る著述に余の全力を以て從はんと欲する」と。又曰く、「余は今までこれほど、人間がその祖國と離れ得ざる關係に存するを知らなかつた」と。又曰く「祖國と云ふ觀念は、佛蘭西人の精神の中に、深くその根基を下し、そして機會ある每に、熱烈なる感情、永久的なる犧牲、英雄的なる行動として、發現し來るものである」と（Sa vie et sa correspondance. III.）

彼はデバー紙（Journal des debats）に記して、「余が佛蘭西史を研究すればする程、佛蘭西人が原來高潔なる心情を、傳統するものなることを知る。佛蘭西國民は佛蘭西兵の如し。兵は平生談笑し遊戲し、人を嘲笑し、非難す。然し一朝事あれば、その全力を祖國のために盡す」とした。彼は革命主義者と云ふ一顏型を指摘して非難し、これを夢想家、狂情家、抽象理論者と形容した。彼が純眞なる傳統に立脚して、國本を識らむとすることは、彼の實證論が、新尙古主義の遺した傳統主義、そして廣義の舊來の傳統主義的文學の境地に、入つたことである。脈々として由來する處に、テーヌの思想が合致して、長く力强き痕跡を遺すに至つたものである。ポール・ブウルジェ亦然り。これら所謂文學的國民主義は、世紀後半に於て、實に近代佛蘭西國民主義の中心たるものであつた。

一八九四年乃至一九〇六年のドレエフユス事件は、上下を搖動して、感傷的な國民主義的言論とならしめた。一八八二年以來一九〇五年に亘る國家教會分離の問題に至つても、反教會思想も亦、國民主義的に統合されてゐた。教會が奉戴する法皇權は、國家國民の權威の中に、他の權威を置くものであると云ふ根本の觀念に由つて、動いてゐた。國家は完全なる統一體に於て萬能なる機能を有せざる可からずとするのである。則ち機能及權威の點に於て觀察せる、國民主義的思想に由つたものである。これと反踵なものも亦、國民主義に於ては、これと同一の立脚に於て一致し得てゐた。この教會分離問題に於て、殊にドレエフユス事件に於て、近代佛蘭西國民主義は、總ての思想傾向を、一傘下に集め得た。悉くそれは古きレジョナリスムの流れに從つた。古きトラデイショニスムの傾向に集められてゐた。反教會的思想に反動した方面に於ては、「秩序を有する有機的組織」の權威としての、舊教主義說の導奉を有してゐた。

由來は甚遠く、且つその發展は甚複雜である。三〇年代の舊教複興の思想に、啓蒙主義的政治論と文學とを合せた自由主義思想はその中から派生轉換した國際主義、或は共產主義に反撥されて、新尙古主義文學の遺響をうけた大きな傳統主義の中の、產出として共和主義的國民主義、例へばバレスの如きものとなつた。そして之に反撥した傳統主義の中の產出としては、君主主義的國民主義、例へばモウラスの如きがある。そしてこれら總てが、國民主義に集めらるゝ處に吾々の關心がある。

史家ブェーンヴイルの如き人々による「聰明會」(Intelligence)が、佛蘭西の文明を基本として、

世界の精神的結合を圖るを目的とし、佛蘭西の完成を主張するものは、謂ふまでも無く國民國家主義的のものである。然しこれに對抗した「明晰會」（Clarté）と雖も、國家國民の文化を以て、人類愛の階段とすることを主張し、國家を目的とせずとしながら、猶且つそれは佛蘭西近代國民主義の一端の表現と謂ふを妨げない。等しく兩者ともに、その共通な强い國民主義的主張に從つて、形容して所謂文化的帝國主義（Kulturimperialismus）とされ得るものである。

「完璧の國民主義」（Nationalisme intégrale）の主唱者シャール・モウラスが、その大著 "Enquête sur la monarchie." に說述したものは、所謂「秩序ある有機的組織」の、權威 autorité を論じたものであつた。彼は、權威は一つの心に集中すと云ひ、民主主義は嫉視の病をもつと云ひ、共和政は足の司配なりと云ふ。この君主政論者に傍して、共和政論者も "La Cocarde" 誌の傘下に、一群をなして、一八九四年以後「國民主義の總主張を披瀝した」のである。Ligue de la patrie francaise の創立、又は Institute d' action francaise の創立、更に又日刊紙 "l'Action francaise" の發行等は、この一群國民主義者等の業績であつた。そしてそれが舊敎主義に由ることは、忘るべからざる處である。この事情は、バレスの "Scènes et Doctrines du nationalisme" に於て窺知されるところである。吾々はこゝに前記のブルユスチエルの、尙古主義而して舊敎主義の語を想起するのである。（H. Miéville La pensée de M. Barrés. V. V. Note C.）

モウラスの君主政論に對する、バレスの位置は、殊に留意されるところである。各種の國民主義論

者を集めた"La Cocarde"の中に、勝れたる論者、而して私のこの小論に謂はんとする、二州問題の言論を觀るものは、モウリス・バレスである。彼の主張は、その著 Scènes et doctrines du nationalisme."の中に悉され。彼に關する評傳、及び彼が近代佛蘭西國民主義の中の、勝れたる位置に關しては、クルチウスの「モウリス・バレス及び佛蘭西國民主義の精神的基礎」に詳かである。(E. Curtius - Maurice Barrès und die geistigen Grundlagen des franzoesischen Nationalismus)

彼の國民主義的思想は、ドレエフユス事件に際して、最もよく窺はれる。彼はこの事件に關するゾラの論說を以て不滿とし、ゾラと等しく彼は共和主張者でありながら、彼にとりては舊教主義と傳統主義とが、對猶太問題の彼の言論の基調をなすことを明らかにした。彼はゾラを以て「絕對の論理者」に過ぎずとして、ロンブロゾ主張(Lombroso-l'Antisemitisme et les juive)に促はれ、拘泥し過ぎて、却つて事の眞事を觀ざるものとした。彼は舊教主義傳統主義に據る國民主義を以て、猶太人に對する、佛蘭西人の名譽と自負とを披瀝した。(Scènes et doctrines, p. 40 et seq) このバレスの反猶太思想が、決してドリユモンのの如き所謂民族的排猶太論の一端でないことは、尠くもかの「猶太化せる佛蘭西(Drumont-La France juive)の一端を見る時に於て、了解されるところである。一は國民の信仰と傳統との顯揭であり。一は獨逸に於ける猶太排斥思想の亞流に過ぎない。

顧みれば、プロヴアンス一詩人の起した文學運動の、新尙古主義的思想は、テーヌのレジョナリスム、トラテイショニスムを經過して、バレスの國民主義主張に、その系流を遺してゐた。そして七〇年

戰役の余影に於て、一八八〇年代の種々なる政治的動搖の間に、二州問題の言論が、このバレスに由つて代表された。

まづ一八八九年の彼の著作「自由人」（Un homme libre）には、その主人公たるフイリツプは、ロルレヱヌ州の田園に友人を訪づれて、佛蘭西の傳統を地方の物語の中に求めてゐた。「邊東の要堡」"Les Bastions de l'Est" の總稱の中に集められるところの、一著作 "Au service de l'Allemague"（一九〇五年）（Nouv.ed, d'après la victoire. Preface に於ても、同樣の言がある）の序文に、彼は記して曰く、「ライン領有の爭は、恰かも日光と降雨との如く、交代に交代を長く續く」とし。又曰く、「著作者としての余が生涯に、出來うべくば、この光榮の日の來ることを希ふ。ライン問題の偉大なる爭、而してそれは、その理解者等の間に於ける爭、且つ又理解者自身の中にも於ける爭に向つて、この書が、一道の光明を齎さんことを希ふ」と。

同書本文中に物語りて、彼は曰く、「余等は期してまつ。この地が、ゲルマンの基調を酌みながら、しかも亦更に、ケルト、ロマン、フランスの不變永遠の基調をも、即ち、余等佛蘭西人の精神をも顯出するに至らむことを」と。又曰く、「いかなる方途に由りてか、二州の人々は、その定められたる運命を、全くせんとするものぞ云々」と。同書附錄も亦、悉く二州問題に關するものである。大戰前に於けるこの二州問題の言論が、いかなる影響を與へたかは、今こゝに謂ふべき處でない。（舊稿）